すなはち大帳使に付し、八月五日を取りて京師に入るべし。これに因りて四日を以て、国廚の饌を介内蔵伊美吉縄麻呂の館に設けて餞す。ここに大伴宿禰家持の作る歌一首

四二五〇番

しなざかる　越に五年　住み住みて　立ち別れまく　惜しき夕かも

五日平旦に道に上る。よりて国司の次官已下の諸僚皆共に見送る。時に射水郡大領安努君広島の門前の林中に予め餞饌の宴を設けたり。ここに大帳使大伴宿禰家持、内蔵伊美吉縄麻呂の盞を捧ぐる歌に和ふる一首

四二五一番

玉桙の　道に出で立ち　行く我は　君が事跡を負ひてし行かむ

正税帳使掾久米朝臣広縄事畢り任に退る。適に越前国掾大伴禰池主の館に遇ひ、よりて共に飲楽す。ここに久米朝臣広縄萩の花を矚て作る歌一首

四二五二番

君が家に　植ゑたる萩の　初花を　折りてかざさな　旅別るどち

大伴宿禰家持の和ふる歌一首

四二五三番

立ちて居て　待てど待ちかね　出でて来し　君にここに逢ひ　かざしつる萩